

少し

河野志帆

少しは役に立つがらくた
放棄した自転車がしんと伸びている
十年と十日
メッキは剥がされて金属は錆びついて
待ち構えていた森の入り口で
旺盛な蔦に絡んでいる
周りの空気と均一になるように
薄く広がって透過して
とける準備はできているけれど
捨てたことを覚えている限りは
消えたりしないものだ
と横切って
まばたいてシャッターを切る
一日毎に繰り返す
わたしはわたしの肉体として
生きて動くことを確かめる
肉体は精神より
すこしはやくに
少し早くに発つらしい
街の中でも森の中でも
似姿を探すのが普通になって
さよならを言わず発ったあなたに
やっと会えたけれど
代わりに長い時間を過ごしていた

あの子にはとても及ばない
道を歩くひと歩くひとの顔を覗き込む
会はずもないとおくの場所に行っても
特徴がなく同じひとはたくさんいる
どの場所も少し早くに発つ
期待をしてかける声というものは
出した途端真下に落ちていったり
逆に頭を突き抜けてしまったりする
ちょうど相手のいる地点
ちょうど相手のいる高さに
差し出せるように息を吸う
油絵の匂いに眉をひそめる
ひとかたまりの声は
ごぼごぼと喉からこぼれていつて
引き出しにしまわれている
スベアの眼鏡と同じで
存在していることがだいじだと思ひこむ
吹き飛ばされても寡黙に鎮座して
書類をせき止めている
ブックエンドのおかげもあり
かろうじて部屋の崩壊は免れている
律儀にお役目を果たす
品々をおきさり
あの部屋とあの街とあの地球を抜けて
すこしはやくにたつように
裏周りするつもりだから
わたしその光線と同一になりそう